

平成 21 年 5 月 14 日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2006～2008

課題番号：18530481

研究課題名（和文） 自己と他者の特性概念間の認知的リンクに関する研究

研究課題名（英文） Cognitive linkage between trait information about self and other

研究代表者

福島 治 (FUKUSHIMA OSAMU)

新潟大学 人文社会・教育科学系 准教授

研究者番号：40289723

研究成果の概要：人は、自己や他者に関する行動特性情報（「親切的」、「気難しい」など）を記憶内に貯蔵している。人の行動は、相手（父、母、友人等）の行動によって変化する面があるので、自己と他者の行動特性情報は、それぞれ独立して存在するのではなく、ある他者の特性情報とその他者と対応する自己の特性情報という形式で、結びつきがあると考えられる。実験結果はこの考えを支持し、自己の特性定義にとって身近な他者が1つの条件になっており、自己の特性情報は他者を条件として分化した面をもつことが示唆された。

交付額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2006年度 | 600,000 | 0 | 600,000 |
| 2007年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 2008年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 2,000,000 | 420,000 | 2,420,000 |

研究分野：心理学

科研費の分科・細目：社会心理学

キーワード：特性情報、社会的自己、人物表象

1. 研究開始当初の背景

自己の成立基盤にとって他者が鍵になることは古くから指摘されてきたことだが、その実証的な証拠は必ずしも十分でなかった。近年の社会的認知研究における研究技法の発展によって、その証拠が集積されつつあり、本研究はその流れの1つとして開始された。

2. 研究の目的

個人が保持する自己と他者の認知表象については、自己表象のほうが他者表象に比較して全般的に豊かであり、状況特定のな内容

が多い (Prentice, 1990) といったように、表象の内容や量の違いが検討されてきた。しかし、最近の研究は、他者表象の活性化によって、その他者に関連する自己表象の利用可能性が増大する (Hinkley & Andersen, 1996) など、2つの表象の関連性を扱うようになってきた。本研究は、これらの表象に含まれる自他の行動特性概念に焦点化して、自己と他者の特性概念間の認知的リンクを明らかにすることが目的である。特定の条件の下で読み出される自己概念は、作業自己概念 (Markus & Wurf, 1987) と呼ばれるが、特

に本研究のねらいとして、この作業自己概念が単に条件に応じて読み出されるだけでなく、その条件に関する知識としての他者の特性概念の活性化に連動して、利用可能性が高まることを示したい。

James(1890)が「社会的自己」を概念化して以来、人は相互作用の相手に応じて、柔軟に自己の行動を制御すると繰り返し指摘されてきた。この制御においては、自己表象だけでなく、相互作用相手の他者表象も同時に活性化されると予見されるが、こうした認知的活動を解明するための試みは、長い間進展しなかった。しかし、この10年ほどの間に、関係性スキーマ(Baldwin, 1992)や関係自己(Andersen & Chen, 2002)のような理論的概念が提出され、対人関係を反映した自己知識の基盤が議論され始めた。これらの理論は、自己表象の一部は他者と結ぶ関係の中で構成されるがゆえに、それが他者に関する表象と結びつく点で共通しており、関連する実証研究は、他者表象の活性化が、自己評価や自己知識といった自己表象の活性化をもたらすことを示してきた(Baldwin & Holmes, 1987; 福島, 2003; Hinkley & Andersen, 1996)。

こうした進展はみられたものの、これらの研究で扱われた他者表象は、他者の視覚的イメージや表情的手がかりのような視覚的情報であった。しかし、他者表象には、その人物の行動特徴を要約した特性概念のように、豊かな意味を持つ情報が含まれている。相手によって変化する自己の柔軟性に関する認知基盤を理解するためには、他者に関する特性概念と自己に関する特性概念との関連こそを明らかにするべきであろう。

このとき見逃せない点は、異なる他者の特性は様々であるために、相互作用の内容が他者の特性や役割に依存して変化することである。この点と、自己の特性概念が過去に経験した他者との相互作用を反映する点をあわせて考えると、人々は異なる他者との異なる相互作用を反映した自己に関する特性概念のサブセットを構成すると予測される。

これをモデル化した先駆例として、Kihlstrom & Cantor(1984)は、文脈特定の自己概念を含む連合ネットワークモデルに言及した。そこでは「他者という自己」の下位構造として、例えば、「父という自己」、「母という自己」、「配偶者という自己」がリンクしており、それぞれは、各他者と構成する状況内の複数の観察から抽象化された自己の表象であるとした。

また、対人相互作用における過去の行動が自己と他者の特性概念に反映されるとすれば、他者を条件とした自己の特性概念は、その形成や更新の過程において、他の他者ではなく、常にその相互作用のパートナーである

他者の特性概念と、同時に繰り返し使用されてきた履歴を有しているであろう。したがって、他者を条件とした自己の特性概念は、他の他者ではなくて、その他者の特性概念の使用によって利用可能性が高まるであろう。つまり、特定の他者の特性概念とその他者を条件とした自己特性概念の間には、他から独立したユニークな認知的リンクが構成されると考えられる。

これらの議論から、本研究では、次の3点の検証を目的とした。

①自己の行動特性概念は、他者を条件としたサブセットとして分化しているであろう。

②それらの自己の特性概念は、各々の条件となっている他者の特性概念と認知的にリンクしているであろう。

③ある他者の特性概念は、その他者を条件とした自己の特性概念の利用可能性を高めるが、別の他者を条件とした自己の特性概念の利用可能性は高めないであろう。

3. 研究の方法

特定の他者の特性概念とその他者を条件とした自己の特性概念との間の認知的リンクを検討するために、課題促進パラダイム(Klein, Loftus, Trafton, & Fuhrman, 1992)を応用する実験を計画した。実験参加者に連続する2つの課題として初期課題と標的課題の遂行を求めるこのパラダイムは、もし初期課題の遂行時に、標的課題の遂行に必要な情報が利用可能になるならば、標的課題の遂行に要する時間が短縮するはずであると前提する。

初期課題を他者の特性判断、標的課題を他者を条件とした自己の特性判断とするとき、もし他者の特性概念とその他者を条件とした自己の特性概念の間に認知的リンクがあるならば、初期課題において、ある他者Aの特性概念を使用するときには、その情報と繰り返し同時に利用されてきた履歴をもつその他者Aを条件とした自己の特性概念の利用可能性が高まるが、そうした履歴を持たない別の他者Bを条件とした自己の特性概念の利用可能性は高まらないはずである。したがって、標的課題としての他者Aを条件とした自己の特性判断の反応潜時は、初期課題が他者Aの特性判断であったときに、他者Bの特性判断であったときよりも短いだらう。

本研究では、上述の論理に基づいて、2タイプの実験を実施した。

(1) タイプI 3種類の初期課題と2種類の標的課題を組み合わせた。初期課題の中の2つは特定の他者に関する特性判断であった。実験参加者は、予め特定した他者Aまたは他者Bについて、呈示された特性語があてはまるか否かを判断した。この課題は各他者の特

性概念へのアクセスを要するであろう。3 つ目は、統制としての意味判断課題であった。すべての特性語は、意味的適用範囲として、人だけに用いるか、他の対象にも用いるかの2通りに分けられる。たとえば、「心の広い」は一般に人間の特性に言及する時に限って用いるが、「あたたかい」は人間にも気候や物体の温度に言及する際にも用いる。そこで、この統制課題では、実験参加者は、呈示された特性語が、一般に人の特徴だけに当てはまるか否かを判断した。この課題は、特性語の意味概念へのアクセスを要するであろう。

標的課題は、他者 A を条件とした自己に関する特性判断、他者 B を条件とした自己に関する特性判断であった。実験参加者は「他者 A という自分」「他者 B という自分」について呈示された特性語が当てはまるか否かを判断した。これらの標的課題の反応潜時が、先行する特定の初期課題によって促進されるかに焦点を当てた。実験デザインは初期課題 3 (意味、他者 A、他者 B) × 標的課題 2 (他者 A という自分、他者 B という自分) の被験者内計画であった。また、他者 A という自分、他者 B という自分の特性判断を初期課題に、他者 A、他者 B の特性判断を標的課題とした試行を含む実験も実施した。他者 A や他者 B には、父、母、友人のいずれかを該当させた。

(2) タイプ I I このタイプの実験は、初期課題で、他者に関する事物関連判断をコントロール課題として含んでいた。特性情報間のみリンクがあるならば、同じ他者に関する判断であっても、事物との関連性を判断したときは、標的課題に対する促進効果は観察されないと期待した。

事物との関連性判断とは、「マフラー」、「洗濯機」、「鏡」といった事物を表す名詞に対して、他者や自己のおよその使用頻度から関連性の判断を求めるもので、頻度が多いと感じられるときには関連あり、頻度が少ないと感じられるときには関連なしという判断を求めるものであった。

実験デザインは、初期課題タイプ (2: 特性判断・事物関連判断) × 初期課題他者 (2: 他者 A・他者 B) × 標的課題特性判断 (2: 他者 A という自

分・他者 B という自分) の被験者内計画であった。また、他者 A という自分、他者 B という自分の特性判断を初期課題に、他者 A、他者 B の特性判断を標的課題とした試行を含む実験も実施した。他者 A や他者 B には、父、母、友人のいずれかを該当させた。

4. 研究成果

(1) タイプ I 実験によって結果が多少異なることもあったが、自己と他者の特性情報の間に認知的なリンクがあると仮説を概ね支持する結果であった。他者 A の特性情報は、他者 A という自分の特性情報ともっとも強くリンクし、他者 B の特性情報は他者 B という自分の特性情報ともっとも強くリンクしているようであった。

図 1 は、タイプ I 実験の代表的な結果である。左パネルは、他者の特性判断が、その他者と対応する自己の特性判断を促進する効果があったことを示している。右パネルは、他者という自己の特性判断が他者の特性判断を促進する効果があったことを示している。

ただし、統制条件の意味判断と比較すると、他者 A の特性情報の利用が、他者 B という自己の特性情報の利用を促したり、逆に他者 B の特性情報の利用が、他者 A という自己の特性情報の利用を促したようであった。単純な特性語の意味判断にくらべて、誰であれ他者の特性情報を判断することが、その後の自己の特性判断を促進したのである。これは、統制条件では初期課題は語の意味判断であったが、実験条件では初期課題も標的課題も特性判断であったことによる促進の効果とも考えられる。

また、タイプ I の実験計画は、初期課題と標的課題の手がかりが同一であることにより、一種の知覚的プライミングが生じている可能性も指摘できる。つまり、初期課題で他者 A の判断をした後に、標的課題で他者 A と

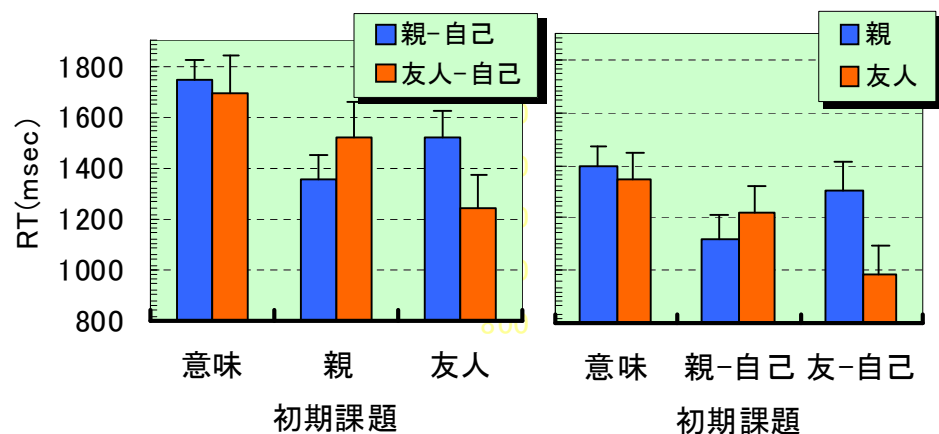


図 1 タイプ I 実験の代表的結果

いる自分の判断をするときには、「他者A」という判断の手がかりが同一になる。この手がかりはPCディスプレイ上に文字刺激として呈示されるので、初期課題の手がかりが「他者A」であるときに標的課題が「他者A」という自分」の場合には、標的課題においては既に「他者A」が初期課題の手がかりとして呈示されていたので、標的課題の手がかりの知覚が他の条件よりも速まり、その分の促進効果が反応時間に表れた可能性がある。

(2) タイプ I I この点を改善したものが、タイプ I I の実験で、統制条件として意味判断の代わりに、他者の事物関連判断を使った。これにより、統制条件でも実験条件でも呈示される手がかり自体には相違がなくなる。したがって、タイプ I で指摘される手がかりの共通性による知覚的プライミングの効果があるとしても、その効果はどちらの条件でも生じることになる。それでもなお条件間に差異がみられればその原因は知覚的プライミング以外の効果、すなわち判断課題の相違に求められる。

このタイプ I I の結果も自己と他者の特性情報にリンクがあるとする仮説に支持的であった。他者Aの特性判断をした後では、同じ他者Aの事物関連判断をしたときや、別の他者Bの特性判断や事物関連判断をしたときよりも、他者Aを条件とした自己の特性判断が促進された。

図2は、このタイプの代表的な実験結果である。これは、初期課題が他者、標的課題が自己に関する判断である試行と、逆に初期課題が自己、標的課題が他者に関する判断である試行を共に含む実験であった。初期課題が特性判断であった左パネルでは、標的課題の特性判断の促進効果が見られており、初期課題が事物関連判断であった右パネルでは、標的課題の特性判断は少しも促進されていない。

(3) まとめ

ある他者の特性判断は、その他者と対応する自己の特性判断を促進したが、別の他者の特性判断は促進しなかった。この結果は、自己の特性判断の際に、どのような条件(他者)を考慮するかによって、人々が異なる情報を参照していることを示唆しており、自己の特性情報のサブセット化、自他の特性情報のリンク、利用可能性の高進によって生じたものと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 4 件)

- ① Fukushima, O. Cognitive linkage between trait information about self and other, XXIX International Conference of Psychology, 2008.7.24, International Congress Centrum, Berlin, Germany.
- ② 福島治 自己表象と他者表象の連合：他者に関する判断が自己の特性判断の反応時間に及ぼす影響 日本心理学会第72回大会 2008年9月21日 北海道大学
- ③ 福島治 自己と他者に関する特性情報間の認知的リンク 日本社会心理学会第49回大会 2008年11月3日 鹿児島県民交流センター
- ④ 福島治 社会的自己の認知的基盤：自己と他者の特性情報間のリンク 日本心理学会第70回大会 2006年11月3日 福岡国際会議場

6. 研究組織

(1) 研究代表者

福島 治 (FUKUSHIMA OSAMU)
新潟大学 人文社会・教育科学系 准教授
研究者番号：40289723

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし

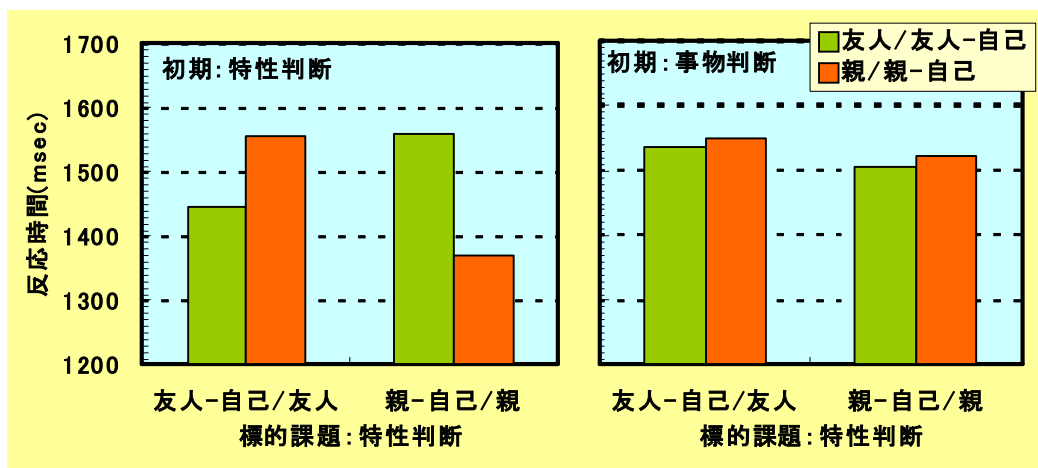


図2 タイプ I I 実験の代表的結果